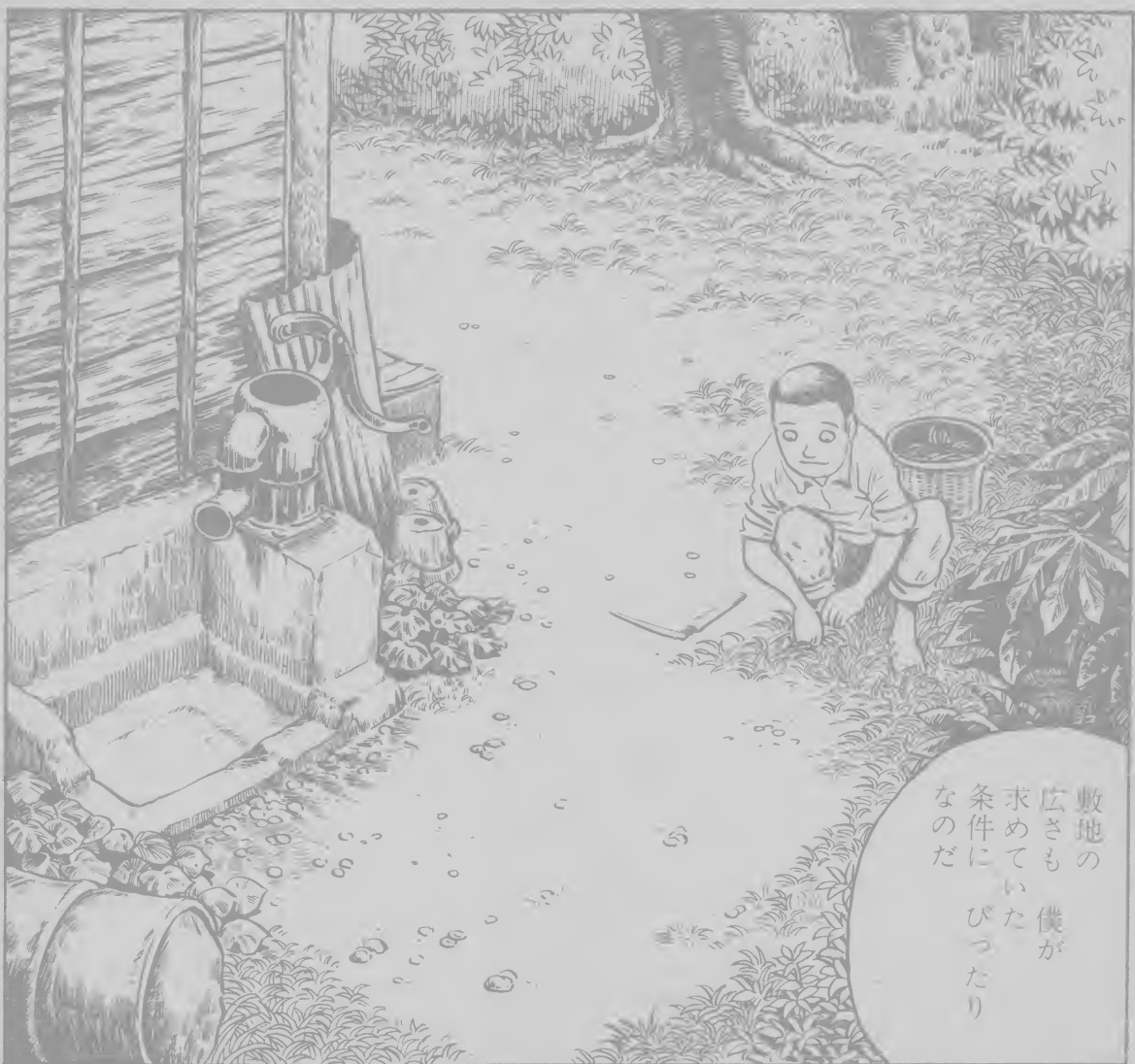
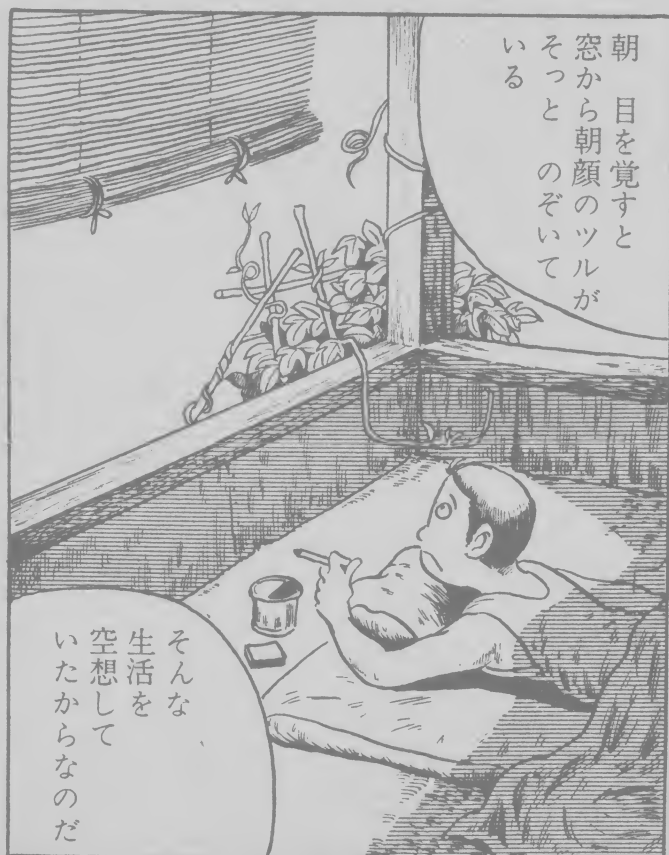
李さん一家

つげ義春

まだコヤシの臭の
残る郊外のこの
ボロ家に引越して
来たのは 昨年の
初夏だった

敷地の
広さも 僕が
求めていた
条件に ぴったり
なのだ

なぜなら
トマトや胡瓜畑
を作り

しかしわがボロ家の庭は隣接の神社の境内との境界線がおぼろげなためしばしば見知ぬ人が迷い込んで来る

男はギャングのカポネ時代に流行ったような縞模様の薄ぎたないズボンを穿きその尻ポケットにむりやり上衣を詰め込んでいるので　そこが　ものすごく出っぱっていた

そして鳥の啼声を真似て樹上の鳥と何やらさかんにしゃべっている様子なので僕は鳥寄せの名人かと思った

彼は僕の方へむき直り
明日は南西の風で良い天気でしょう
とさっき僕がラジオで聴いた天気予報とそっくり同じ文句を云うのだ

彼は世にも稀な鳥語を話せる人間で
いまの天気予報は樹上の雀から教えて貰ったのです

彼のかもし出すムードにのまれてしまったのか大法螺に惑わされてしまったものなのか一家四人がいつのまにか二階の六畳に住みついてしまったのだ

李さんには
定職がなくおまけ
にそうとうな怠者
なので生活は
かなり苦しいら
しい

この奥さんの笑顔は
まだ一度もみたことが
ないべつに怒っている
わけではなく
といって表情に乏しい
顔立でもない
大ざっぱなつくりでは
あるが目と口が
大きい色ぐろの
グラマー
である

それは僕が作った
胡瓜を時たま
奥さんが失敬して行
くのを見てもわかる

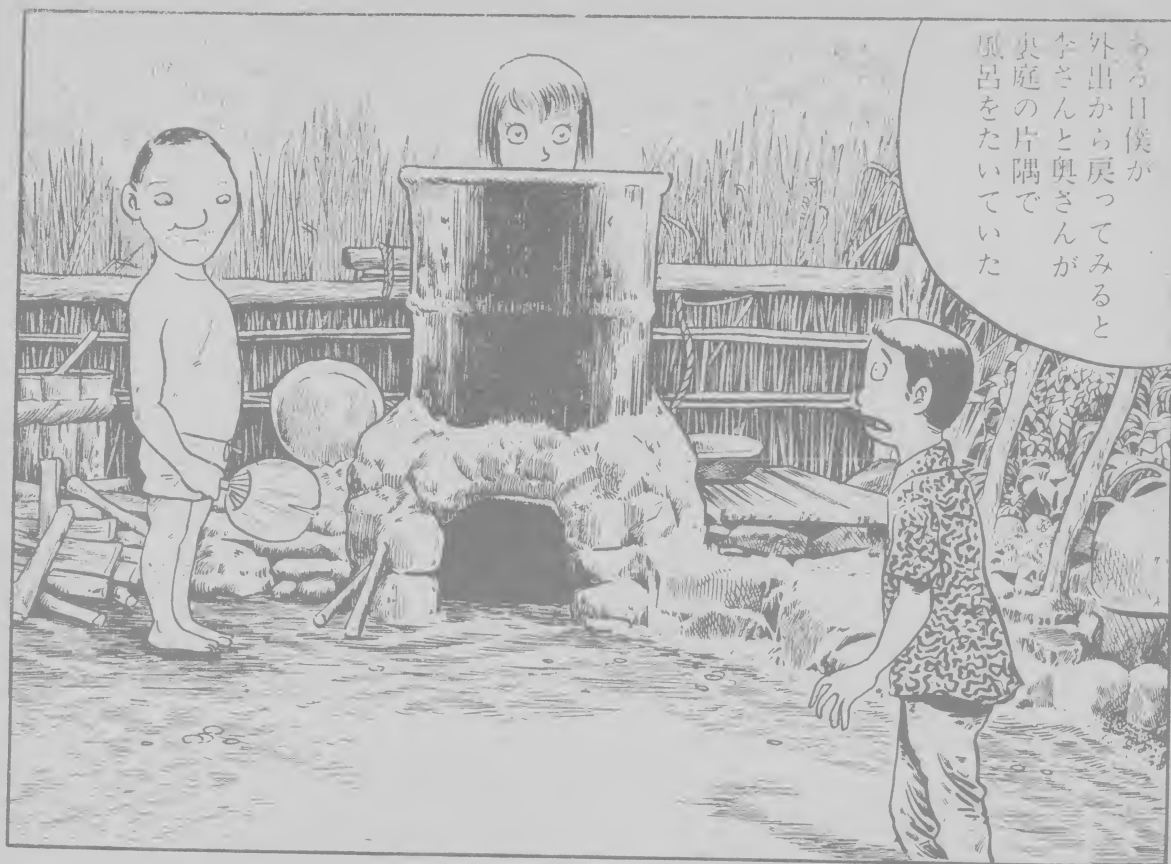
四才になる女の子は
栄養失調みたいに
痩せこけ陰気
だ
その下の男の子は母親似
で長女のお古を着ている
のではじめは女の子かと思った
ほど可愛らしいが二人とも
泣いたり笑ったりあまり
しないで薄気味の悪いほど
静かな子供である

奥さんはなにかにつけ無頓着で子供の面倒もあまりみず女のやるべき仕事はなにもしない

その日の食糧が無くとも夕方李さんがどこからか金の工面をしてくるまで空腹のまま平気でいるのだ

李さんが外泊することはたびたびでそんな夜はけっして階下へ降りてこようとはせず

小用は牛乳ビンですませて翌日胡瓜畑へまいてしまうのだ

コヤシを提供しているつもりなのだろうか　この頃は当然のような顔をして胡瓜をもいでいく

ある日僕が
外出から戻ってみると
李さんと奥さんが
裏庭の片隅で
風呂をたいていた

家内は千葉県の出身でカジメ採りをやっていたのです

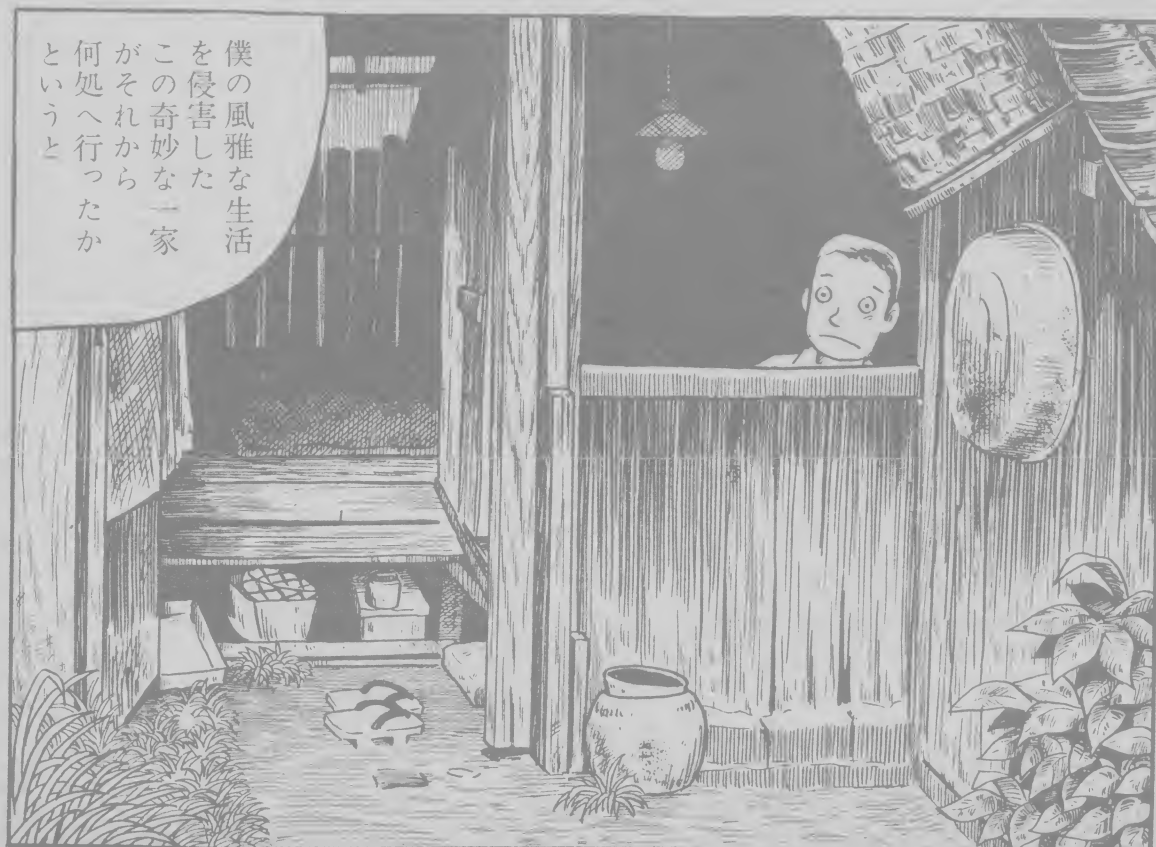
二分間も呼吸をとめて海の中へもぐるのです

カジメという海草はエキホーソというききなれない薬品になるらしい

奥さんは僕に実演をして見せてくれたのであるが丁度二分後に顔を出すとそのままぐんにゃりのびてしまった

大変です大変ですのぼせてしまったのです

李さんはあわてて助け出そうとしてもなにしろグラマーなので上半身をひき上げるのが精一パイなのだ

僕の風雅な生活
を侵害した
この奇妙な一家
がそれから
何処へ行ったか
というと

つげ義春先生の住所は、都下調布市富士見町一の九の十五　武良茂方

完　42．3．27